



新潟の水辺だより

Vol.42

●編集発行・新潟の水辺を考える会 ●発行日・1997年8月7日 Vol.42

TOPICS

佐潟のハス採り大会を考える

佐潟のハス採りを9月6日にC.W.ニコルさんをお招きして行う予定であるが、そのまえにハス採りの意味を少し考えておきたいと思う。現在の佐潟では湖面にハスがかなり繁茂した状態になっている。このため白鳥やガン・カモが冬季において着水しづらい状態になりつつあると思われるので少し刈り取りをして、あわせてむかしの佐潟と人間のつながりを思い出し、市民レベルの活動として楽しもうというのがその趣旨だと思う。

このことに関して何度か打ち合わせがもたれた。その中にはいろいろな意見が出された。ただ、ここで重要なのは、「潟を少し使わせていただくという気持ち」ではないかと思う。特定の生物のみを保護するとか、また逆に排除するとか言うことは生態学的に見ても決して良いことではない。自然保護というよく特定種を何とかしようという議論に落ち入りやすい。しかし、人間の知識といったものは自ずから限界があると思われる。

我々は時として短期的な経済性とか効率性とか、科学的な考えとかにとらわれがちであるが、謙虚になって考えてみると、本当の自然というものは何もわかっていないのではないかと思う。であるから、私たちの自然に対する行為の影響など本来予測しきれないものだと思う。やはり考えるべきは生態系全体のキャパシティの大きさの維持だと思う。その中で我々のとれる態度というものは、少しだけ自然を利用させてもらうという姿勢ではないかと思う。

この大会はハス採りをするのが目的ではない。だからハスは少し利用させてもらうにとどめて、これを通して地域と人と自然、過去と未来、それを確認する事こそが重要なのである。そのようなきっかけにこの大会がなることが、私としては一番望ましいと思う。

ラムサールシンボの佐潟の考える輩
五十嵐 実

第8回全国トンボ市民サミット

トンボと関わりを持つ市民団体は全国で50を越えるものと思われ（正確に把握することは困難）これらの団体が関与するさまざまな規模の水域は、数百に達していると推定される。

児童と教師・父母が一緒になって「学校のトンボ池づくり」や観察会をおこなっているものや、行政機関と協力して水辺の整備や管理をやり「トンボ公園」を維持している市民団体がある一方で、開発や建設工事によって生息環境が消失することに抗議し、行為の中止や変更を求める運動を展開している組織がある。

活動形態はおおよそ、

- ①自然環境教育を主たる目的とするもの、
 - ②トンボの生息環境の創出を主な目的とするもの、
 - ③トンボの生息環境の保全を主な目的とするもの、
 - ④学術的な調査研究を主な目的とするもの、
- に分類できるが、多くの場合2~3の目的を併せた活動を行っている。全国トンボ市民サミットは、このような市民団体レベルの多様な活動の経験を交流して、教訓や、技術を共通の財産として蓄積して、トンボを軸とする生物との共存社会の構築を目指すことをおおよその合意事項として、過去7回、主として太平洋側の都市で行われてきた。

過去のサミットにおける討議課題は、

- ①生息環境の創出と保全、
- ②トンボを軸とした自然環境教育、情操教育、
- ③トンボ保護活動の理念と実践、に整理できる。

日本海側で初めての市民サミットでは、これらのテーマを追究しつつも、新潟らしさの滲み出るサミットとしたいと思っている。

このサミットを契機に、もっとも身近な自然と生物を守り育てる運動が県内全域に広がっていくことを願っている。

石月 升

プレ・トンボサミットに500名が参加

実行委員会では、全国トンボ市民サミットの事前活動として、清濁を対象とした各種のイベントを企画し実行しました。

3回のイベントには、緑の少年団（小学生）を中心に約500名の町民の皆さんが参加し、実行委員と一緒に汗を流しました。



ブラックバス釣り大会の表彰式

ブラックバス釣り大会では、大物賞や大漁賞が授与され、釣り上げたバスはトンボの幼虫を食べていることなどを確認したのち、バター焼きして子供達の胃袋に入りました。この後、各家庭から持ち寄った草花や、セリ、ハンゲショウ、ヤナギなどを濁の周りに植えました。

トンボ観察会は、子供とお母さん、おじいちゃんなどが多く参加し、15種類のトンボを確認しました。オオトラフトンボらしき個体を目撃しましたが採取できず、新出現種とはなりませんでした。



新設された水路に水草を植える子供たち

ブラックバス退治とハス抜き大会は、漁協の協力を得て200mの刺し網を張り、船で混みすぎた蓮を抜き取りました。バスは味噌焼き、ハスはテンプラとなって試食されました。

参加者の内訳は次のとおりです。

5月18日ブラックバス釣りと草木を植える会	220名
6月22日トンボ採取・観察会	110名
7月13日ブラックバス退治とハス抜き大会	100名

黒姫の森と川

1997年5月10日朝、水辺の会の皆さんと連れだって、C.W.ニ科尔さんのお宅を訪ねた。

まず車で5分ほど山へ入ったところに案内された。スマレが辺り一面に咲いていた。小さな小さな森の花を踏んづけないように池に向かった。池の水は土色に濁っているけど、一番上流にはリュウキンカが咲いていた。大勢で押し掛けた私たちを避けてカワセミ夫婦が森の中を飛び回っていた。余り人を恐れないコゲラが「ギーッ」と鳴きながら樹間を渡っていく。きっと誰もいないときは、虫を食べにキセキレイが、池の鯉をねらってアオサギが来ているにちがいない。池の周りに彼らの糞が落ちている。池に面した赤土の土手は草が生い茂り、カワセミが巣を作るには邪魔になるようだった。湧き水を利用して掘り込んだ池にも毎年少しずつ変化が起きる。人間が関わり、その変化を少し止めることくらい許されるはずだ。ニ科尔さんが植えたシラカバやサクラも数年先には見事な樹に成長しているだろう。



案内して下さったニ科尔さんありがとう。

鳥居川と呼ばれる川がニ科尔さんの家のすぐ脇を流れている。新潟県の関川が水害にあった同じときこの川も一部決壊した。ニ科尔さんの家のすぐ下流で樹木が植えられてない部分だった。養魚場と水田が流れ出た水で被害に遭い、災害復旧工事が行われた。ちょうど工事が行われたとき、大地主で高額納税者のニ科尔さんは海外に行っていた。まったくニ科尔さんは意見を言えなかったそうだ。大きな岩をコンクリートで固めた川はおせじにも美しいものとは言えない。デリケートな部分がまったく感じられないのもニ科尔さんの怒りを買ったのだろう。水害防備林と言えるかどうか、鳥居川の上下流には樹木が多い。ほとんど樹木がない関川とは対照的な印象だ。災害復旧予算をあわせて使う現代の土木では、治水と環境、人間と自然の調和を考えている余裕がないのだろう。この次に起きる洪水で鳥居川にはどんな変化が起きるのだろうか、気になる現場だった。

編集鳥（長）高橋 正良

通船川夢の架け橋講演会

6月7日(土)新潟市万代市民会館で日本大学理工学部交通土木工学科教授の伊東 孝先生の橋についての講演会が行われました。その前に高橋編集鳥(長)と私とで通船川を案内させていただきました。伊東先生は東京の木場の育ちということで、貯木場の木の匂いを懐かしがるとともに、私達がどうしようもなく汚れた川だとイメージしている通船川も、大都市の都市河川に比べればまだまだきれいであることや、水面と人の距離が近いこと、わずか8.5kmの区間に閘門が3つもあるのは面白いということなどから、まだまだ捨てたモンではないとコメントされていました。肝心な通船川に架かっている橋については水道橋と近接している橋が多いため水道橋のデザインもポイントになるのではないかとということです。



貯木場の感想を語る伊東先生(中)と高橋編集鳥(長)(右)

講演では、全国各地の名橋の紹介、住民参加型のワークショップによる橋のデザインの事例紹介などの内容で、ここでも通船川を見てきた感想を述べられていました。

また、群としての橋ということで通船川の橋のトータルなカラーリングを考えるのもいいのではないかとことや、愛される橋を作るポイントは完成後に住民が手を加えられる部分を残すことや、良い物を作って長持ちさせることも大切であると話されました。

杉山 泰彦

通船川魚釣り大会

6月15日午前9時～午後2時、新潟ジャスコ東店北側薬師橋を中心に通船川観察のための魚釣り会を開いた。参加者は大人16人、子ども15人。竿は各自のものを使う。餌は東公民館が用意した。淡水魚用の粉状のものを井戸水で練り、球にして分配。釣り時間を12時までとし、橋を挟んで上流と下流に分かれた。水は底が見えず、油も浮いている。このため魚は食用にできない。快晴無風の静かな水面である。藤見中学の二年男子生徒数人は特に熱心に釣り始め、家族づれも楽しそうだ。

時間になり、釣魚総数、総量、魚種を記録しジャスコ中庭で表彰式に移る。この魚は、井上 信夫氏に標本にしてもらうことを伝え、中学生達は魚が役に立つことに目を輝かせた。

大漁賞、大物賞が大人、子ども各一人づつに渡された(賞状とジャスコ協賛の賞品)。阿賀亭の釜飯を昼食として散会した。

今回の反省点は、餌のこと、釣り方を経験者に説明を受ければよかったことである。

記録は以下の通りである。

魚総量5Kg

魚総数及び魚種

ニゴイ 1/ハヤ 1/ギンブナ 18/ゲンゴロウ

ブナ 18/ハンペラ 29/フナ稚魚 2

ヤゴ・ウシガエル・オタマジャクシ

田原 富子

市民がつくる 通船川マスタープラン

通船川ルネッサンス21の呼びかけで92年に始まった通船川再生運動も東地区公民館の環境講座の中で当会の「汗をかく運動」としての参加とともに、95年北陸建設弘済会の研究助成を受けながら「通船川ネットワーク」として成長した。96年には中地区を考える会の参加、さらに、ジャスコや東山ノ下小学校等の参加によるクリーン作戦実施、97年には新潟合板なども加わった花筏ネットワークプロジェクトと治水・利水・親水・自然環境にとどまらない都市河川環境としての多様な可能性を探り始めている。ここに追い風として、河川整備基金から60万円の市民活動助成がありました。この資金を主に、通船川・栗ノ木川沿川自治会や学校、企業、団体、個人への通船川再生運動のネットワーク化を進めるための情報発信=通船川ニュースと沿川地域の資源調査(子供版宝もの探し)と地域点検調査(同イエローカード)に向けようと考えてる。

通船川ネットワーク 世話人 相楽 治

河川法の改正に思う

1.はじめに

1997年の第140国会において、河川法が大きく改正された。6月4日に公布され、6カ月以内に施行されることになっている。そこで、少々堅苦しくなるが、簡単に河川法の経緯に触れ、今回の改正点について若干のコメントを付けておきたい。

2.河川法の歴史

河川法は、江戸時代以来地域住民を主体として利用・管理されてきた川を、国家が管理し、代わりに治水費を支払うことを決めたもので、101年前の1896年に制定された。これを、水系一貫の管理制度で、治水とともに水資源開発を行いやすく改めたのが、33年前の1964年であった。

3.主要な改正点

①河川環境の位置付け：今回の改正の第1点は、従来「環境」という言葉が一語も入っていなかった河川法に、第1条の目的として、次のような言葉が入ったことにある（下線部分が追加）。第1条 この法律は、河川について、洪水や高潮等による災害の発生が防止され、河川が適正に利用され、流水の正常な機能が維持され、及び河川環境の整備と保全がされるようにこれを総合的に管理することにより、国土の保全と開発に寄与し、もって公共の安全を保持し、かつ公共の福祉を増進することを目的とする。

②樹林帯の導入：改正の第2点は、第3条に、「河川管理施設」として、ダム、堰、堤防、護岸などの人工物に加え、「樹林帯」という自然物が追加されたことである。樹林帯は「河畔林」とも定義されており、私がかねがね治水の基本に置くべきだと主張してきた「水害防備林」そのものである（図参照）。これは、堤防の破堤による大氾濫は食い止めるが、堤防を越流して溢れることは受容するというものである。技術的には近代河川工法から自然との共生を目指したポスト近代技術への展開を示唆するものであり、画期的な改正であると考えている。ただ、従来の河川工学書には「水害防備林」の記述がなく、多くの河川技術者にとって寝耳に水的な存在であり、1990年通達の「多自然型川づくり」と同じように、これが定着するまでに10数年以上の紆余曲折があるものと考えている。



住民参加：第3点は、16条に、河川の具体的な整備を進めるために、「必要があると認めるときは」、「河川に関し学識経験を有する者の意見を聴かなければならない」、また「公聴会の開催等関係住民の意見を反映させるために必要な措置を講じなければならない。」と住民参加を謳ったことである。

従来の河川法では、技術者が決めた計画は、国会で予算さえ認められれば、誰に気兼ねすることなく実行できる制度になっていた。今回、「必要があると認めるとき」という但し書きが付いているが、住民の意見を聴かざるを得なくなったことに一つの前進があるといえる。確かに、公聴会が義務づけられている都市計画法の場合と比較して、後退している。実は、この住民参加の仕方が、政府案に対抗して出された民主党案と大きく異なる点でもあった。しかし、今の世の中、ほとんどの場合は「必要があると認めるとき」に該当するであろうし、また、そうなるように住民が積極的に参画しなければならないと考える。そういう意味では、反面教師的に良い条文なのかも知れないと考えている。

その他、異常洪水時の事前の水利調整や船舶の不法係留対策などが新たに規定された。紙数の関係で詳しく述べられないが、いずれ何かの機会に、新河川法の勉強会を開きたいと考えている。

大熊 孝

第2回環境フェアに参加

6月1日、新潟市主催で古町7番町にて、ボランティアグループ、企業、海上自衛隊などが参加して催された。新潟の水辺の会10年の歩みと題し通船川ネットワークの皆さんと一緒に県内外を視察した模様とワークショップの様子をパネル1枚にまとめ、これまで発行された会報と今後予定された催しもの案内を2枚のパネルにまとめたのを掲示。

また、今回は生き物も展示することになり、通船川に生息するフナ類(約25センチ級)数匹・アメンボ・オタマジャクシ・ヒルなどと一緒に通船川の上・中・下流の3箇所の水を採取して汚れ具合の判断材料に展示したのを見て多くの方が「ワァーこんなに汚れてると関心をつつめた。

星島 卓美ほか5名

「通船川クリーンアップ作戦」お知らせ

汗をかきながら通船川の再生を考えようという「通船川クリーンアップ作戦」を実施します。3回目となる今回の活動のトピックスは、通船川のほとりの東山の下小学校のPTC(保護者、教師、児童の意味)全校清掃活動と連携して堤防の清掃を子供たちと一緒にやること。地元企業や周辺の住民にも呼びかけます。C.W.ニコル氏も激励に立ち寄って下さるとか。多数ご参加ください。

◆日時 9月6日(土)9時~12時
集合場所等は追って広報します。

浅井 敬一

亀田郷地域グラウンドワーク

(財)亀田郷地域センターは、昨年(財)日本グラウンドワーク協会へ入会いたしました。「グラウンドワークとは、地域を構成する「住民」、「行政」、「企業」の三者がパートナーシップを組み、「グラウンド(生活の現場)」に関する「ワーク(創造活動)」により、生活の最も基本的な要素である自然環境や地域社会を整備、改善していく活動」とあります。

その意味において、通船川ネットワークの取り組みは、すばらしい実践であり、私たちもそれぞれの得意分野で「いい汗」をかいていきたい。

亀田郷土地改良区 藤井 大三郎

新潟NGO大会&
エコ・アクション開催

9月6日(土)と7日(日)、新潟ユニゾンプラザなどでの開催が計画されています。

初日は、この水辺の会などが行う佐潟ハス採り大会と連携しながら、環境NGOのひきいる街頭(古町)でのピラ配りや環境パフォーマンス(?),海岸清掃や鳥屋野潟ウォッチングといった野外での実践活動などを展開し、夜には県内のいろいろな環境ボランティアと交流会(宴会?)を行う予定です。

2日目には、それぞれの活動分野ごとの分科会と、御馴染みの環境寸劇(ロールプレイ)を計画しています。

ナホトカ号からの重油流出事故などで環境ボランティアの重要性が再認識されている中、様々な環境NGOからの「情報交流がしたい!」という声を背景に、環境NGOが中心となった実行委員会で大会準備を進めているところです。環境ボランティアの交流の広がりの促進と活動の活発化に向け、大会への参加と会員の皆様の御協力をお願いします。

環境NGO大会実行委員会事務局 野沢
Phone 025-285-5511 (内線2699)

「21世紀の川守として
の子供達に期待!」

■水辺の子供賞について

前回、新潟県異業種交流センターから頂いた地域活性化大賞の使い道として「子供賞」を提案した。当会の終局目標である水辺環境の保全と向上において、将来にわたる水辺の「守役」を誰がやるのかは重要なポイントである。河川管理者だけ?漁業者?釣師?カヌーイスト?川畑の農家?川に親しむ市民?川に関わる企業?結局、皆なだけで、将来にわたって担保となるのは子供である。新しい「川守、潟守、水守役」として、いろんな人やグループを育て、いろんな守る手法の作法や仕組みを育てたい。そのために、第一回の水辺の子供賞を11月22日の水辺シンポジウムで発表した。第一回は会員推薦=会員審査とし、第二回は受賞した子供たちも審査委員だ。

ドシドシ、会員は推薦して!!

詳細は相楽へ。

世話人 相楽 治

シリーズ—環境を読む— 第1回環境を読む

私は、雪国の中山間地の集落や民家をいろいろ訪ねてきました。そこには、雪や水を含めた自然環境を巧みに利用する暮らし方がありました。私が特に惹かれているのは「横井戸（よこいど）」で、これは沢・湧き水・井戸のそれぞれの特徴を持ち合わせた水源です。また夏季まで雪を残す「雪室（ゆきむろ）」もとても興味深く、江戸時代にはすでに峠の茶屋にカキ氷があったなんてみなさん知っていましたか。これらを含めた自然環境の読み込みと仕組みの話、を何回かにわたって御紹介していきたいと思います。

星名 康弘



安塚町戸沢の民家。山側から横井戸をひき、谷側から風をとりこみ生活している。

「水辺の会」 異論・反論・オブジェクション

■会員の考える水辺の会版「声」

新潟の水辺を考える会も97年で丸10年となる。7月現在会員180名（内団体企業13）、県内だけでなく札幌、釧路、山形小国、会津、茨城牛久、埼玉、東京、横浜、名古屋、神戸、山口、北九州まで広がっている。会社員・主婦・農業者・自営・団体職員・大学教官・専門家・教師・議員・行政・芸術家・退職者など多種多様な市民=産・官・学・民の各層の人々の集まりになった。水辺のテーマコミュニティの登場である。当然のごとく、当会はかくあるべしの”意見””異見””提言”がある。それを一人「200字」以内のシリーズとして始めます。ドシドシ送って下さい！

◆＜参考までに＞

会員は主婦、農業技術者、会社員、自営の技術者、企業経営者、料理人、教師、大学教授、教育委員会職員、冒険指導者、市会議員、県会議委員、医師、弁護士、税理士、アーチスト、写真家、退職者、塾講師、福祉の専門家、ボランティア団体職員、消費者団体指導者、財団職員、行政計画者、

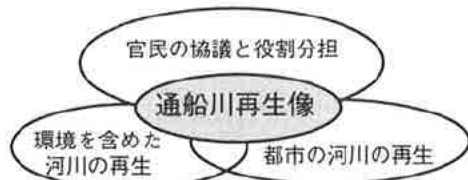
公民館職員、コンサルタント、都市計画家、建築家、公園プランナー、造園技術者、水環境専門家、建設企業、河川専門家、河川管理者、河川技術者、下水道技術者、砂防技術者、自然環境保全コーディネーター、ジャーナリスト、アナウンサー、マンガ家、イラストレーター、デザイナー、文化プロデューサー、養魚家、魚類専門家、鳥類専門家、トンボ研究者、植物専門家、植物愛好家、民宿経営者、映画監督等等である。

世話人 相楽 治

県新潟土木事務所山岸氏、平沢氏、 新潟市土木管理課西潟氏を招き 7.19通船川セミナー開催

現在、沿川では流域の治水、排水、利水、水質改善、歴史文化を生かした景観・地域づくりをテーマに県と市による通船川・栗ノ木川再生検討委員会が開かれている。そこでは、これからの川のあり方を地域の住民や市民を交えて探っていくことも論じられているという。三氏の話でセミナー参加者は、1) 河川に対して受益者であったり被害者であったりする沿川住民や企業、団体の協力や参加なしには川は再生しないこと、2) 従来の河川改修から環境に配慮した河川改修にして行くためにはかなりの予算が必要だが国の予算が抑制される中ではじっくりと取り組まざるをえないこと、3) 河川整備だけでは、都市と河川が一体となった川づくりにならないことなどを学んだ。新聞（新潟日報7.19県都版）でも報道されているように通船川を①川の再生の検討をする住民と協議する手法、②治水、利水、環境など多様なテーマで川の再生を図る手法、③地域全体の再生を図る都市の河川のあり方手法などのモデルにしたいという。私たち、市民側も河川管理者とパートナーシップ（対等な関係）を築いて行くためには責任ある主体として認められる努力と自ら通船川・栗ノ木川のあるべき姿を提示し、実践する努力が問われていると思う。そのために、多様な意見、異見を持つ人々のネットワークできる「場」として通船川ネットワークは広範な人々を包括する情報や運動に成長してゆくことが求められている。

世話人 相楽 治



会員紹介

MEMBER'S

S

飯野 吉喜



昨年、サンアントニオのリバーセンターへ行き、川（運河）を中心とした画期的なまちづくりを見て、非常に感銘を受けました。やはり、水辺と花と緑の空間はうるおいと安らぎを与えてくれます。これからも、リバーボーイとなってあちらこちら出かけたいと考えておりますので、よろしくお願い致します。

成田 清五



通船川ルネサンス21の星鳥さんと阿賀野川の水辺にてお逢いしてから、私の川に対する使命を強く感じました。水辺にてギターをひきながら友と話し合う環境作りに努力致します。又、河川愛護モニターとしても勉強致します。夢は住民主体の水辺ふれあい花公園作りです。よろしくご指導下さい。

関 一弥



子供の時、家のすぐ後を魚野川が流れていて、その音を聞きながら育ちました。そのせいか、今度、引っ越す所も信濃川のすぐそばになります。趣味は海外旅行、今年の夏も「メコン川」を見に行こうと思っています。

三木 公一



小さい頃から最近まで、ボーイスカウト活動を通じて県内の様々な水辺を観察してきました。また、仕事でも、河川とのかかわりが多いため皆さんと一緒に、ふるさと新潟の貴重な水辺について考えていきたいと思っています。

小澤 良章



環境問題が叫ばれている昨今ですが、まず自分自身でできることから行動してみたいと思入会しました。好きな水辺は、「じゅんさい池」です。緑が多く自然とのふれあいを感じます。

板橋 昭彦



昔よく遊んだ自然豊かな小川や池、最近ではコンクリートに一面覆われつまらないものになっている様に思います。この会で、これからの水辺のあり方を色々勉強させてもらい、少しでも素敵な水辺づくりの手伝いが出来ればと考えています。どうぞよろしくお願い致します。

伊藤 善和



河川の仕事に関わってかなりになるが、生物や利用者の視点から考えられるものはまだ少ない。もう少し自然環境や利用者立場からも色々考えていきたい。

知野 泰明



3年前の水辺だより「新入者登場のコーナー」で非常に短い連載をさせて頂きました。自己紹介は、そちらが詳しいです。今は、大学で再び土木史の研究を続けています。最近、近世の治水技術について発掘指導に呼んでもらえるような身分になりました。皆様、福島県の川も見に来て下さい。

EVENT INFORMATION

▲7月26-27日魚野川流域ウォッチングと交流会：登川一三国川一シャクナゲ湖一五十沢キャンプ場一皆沢川など／世話人水辺の会 因幡さん 井良沢さん
▲同日開催イベントしゃくなげ湖Eポート大会／森と湖にしたしむ旬間現地実行委員会
▲7月27日妙見堰子供祭
▲7月27日、8月10日亀田郷ほか生きもの調査・観察会／(財)日本グラウンドワーク協会他共催、協賛亀田郷土地改良区
▲8月2日午後から夜まで新潟西海岸夢フェスタ／森本世話人：森本バンド出演プログラム有
▲8月2日抱きしめよう福島潟／お祭りさわぎ実行委員会2主催：7000人で潟を取り囲み抱きしめます。参加費=Tシャツ。／世話人横山さん(豊栄公民館内)
▲8月3日魚野川イカダ下り／魚野川を育む会羽吹世話人
▲8月10.11.12日大好き信濃SNOW・WATERフェスティバル／96実行委員会
▲8月9日信濃川水系サミット子供会議：十日町信濃川河川敷／信濃川ファンクラブ主催／大熊会長、相楽参加：通船川ネットのキッズクラブ?のこども数名参加予定、長野-十日町-魚沼-長岡-新潟の子供達が参加。十日町信濃川フェスティバルに便乗、他のイベント有
▲8月16日-17日第10回「どんつき祭」走れ!どんつき「日本海に浮かぶナイアガラ」／消防記念新潟保存会・一番会主催
16日花火大会午後7:30~8:30新潟市青山海岸／17日どんつき祭午前11:00~午後6:00新潟市寺尾中央公園
▲8月18日全国リレーシンポ「地球温暖化シンポジウム・イン・新潟」／(財)地球・人間環境フォーラム(財)社会経済生産性本部主催／～自然が、生活がかわる?温暖化の脅威～、基調講演：原沢 英夫・西澤 輝泰／パネルディスカッション／午後1:30~5:00／新潟市民プラザ(NEXT21)
▲8月22日-24日第12回ドンデン銀河コンサート／国民宿舎大佐渡ロッジ主催／佐渡ドンデン山一ノ段／南 正人他、日本、フランス、アフリカ、タスマニア島のミュージシャン／1日券1,500円・通し券3,000円
▲8月23-24日全国トンボサミットイン紫雲寺町清潟／全国トンボサミット実行委員会主催、石月世話人：全国から極楽トンボ500人(羽)参加予定。トンボ釣りや環境共育、トンボの環境づくり、トンボのまちづくり、記念講演「森と暮らす、森に学ぶ」柳生 博氏

▲8月24日佐潟植物と生きもの観察会／佐潟ネットワーク
▲8月26-29日国際火の玉学会イン津川／津川町主催：狐火一怪し火一火の玉の研究家がイギリスなど世界から参加。え!地獄極楽から参加者いるかって?そんなこと津川狐の嫁入り屋敷の五十嵐さんに聞いてくれ!
▲8月27日-29日プロジェクト・アドベンチャー体験・講習会／雪だるま財団主催／PA体験講習／安塚町菱ヶ岳グリーンパーク／午後1時／3,500円
▲8月30日小針海岸クリーン作戦／FM新潟、午後2:00~4:00海岸20周年記念式典／主催：信濃川下流工事事務所協力：関屋中学校
▲9月1日-10月3日しなの川音楽祭第4楽章絵画・音楽・ダンス・映画・講演・シンポジウム他イベント／しなの川音楽祭実行委員会／世話人中島太郎さん、長岡商工会議所樋口部長、
▲9月6日水辺の会汗かきデイ Am「通船川クリーン作戦」Pm「佐潟ハス採りを楽しむ大会」／世話人浅井、高橋、進、森本、相楽、C.W.ニコルさん福田さんも参加予定。
▲9月6日環境NGO大会とエコアクション／同実行委員会、森本世話人
▲9月7日津川阿賀野川レガッタ150艇参加予定／津川町主催：水辺の会から98年に参加予定!
▲9月20日「草刈り十字軍」上映とシンポジウム／世話人水辺の会尾形さん
▲9月20日講座「信濃川」／共催信濃川ファンクラブ：大熊孝氏、斎藤宏保氏、結城モイラ氏、片桐一夫氏
▲10月11日とびっきりの「ありがとう」記念講演会／新潟県モラロジー支部生涯学習フェスティバル実行委員会主催／体験作文発表会／記念講演会「私の生き方」中村メイコ／新潟テルサ大ホール。／午後1:30／無料
▲10月18-19日水郷水都全国会議松江大会
▲10月31日-11月1日横浜五港景観会議
▲11月22日水辺の会・通船川ネットワークシンポジウム：万代市民会館／水辺の会・通船川ネットワーク主催

編集後記

通船川再生復活マスタープランづくりと佐潟ハス刈り大会が活況に入ってきました。市民が「普通の生活をしながら身近な生活や環境と関わるためにどんな働きをしたらいいのだろうか?」素直な疑問を持ちます。自分の身近な水辺を考えることをきっかけに仲間と話し合ったり、行政と話し合ったり、地域の歴史や文化、土木の知識を勉強したりするようになります。ワイワイガヤガヤ楽しいウォッチングや専門用語も時として飛び交う勉強会に参加します。なんと自分は地域のことや税金の使われ方を知らないことか、改めて勉強不足を思い知らされます。「日本の水害一災か人災か」小出 博編著を改めて読む。以下新潟市内で二つもテーマを持つと当然月2回以上は会合があります。他の地方の仲間の応援になかなか行けません。仕事と市民活動の境目がなくなってきます。マスコミ露出が多く、やたらに先生扱いされます。パードウォッチングどころか、フライフィッシングもいけません(本当は仕事にかこつけて行っている)。こんな編集鳥(長)に誰がしたわけでもない、自分がなったのです。

1997.8 編集鳥(長) 高橋 正良 masayosi@on.rim.or.jp

●事務局 〒950-21新潟市大学南1丁目7821-5 (株)グリーンシグマ内 Phone 025-263-2733 Fax 025-263-1134

●編集 〒951新潟市関屋1422-10 (株)サザンウインド内 Phone 025-234-1153 Fax 025-234-1173

●URL <http://www.on.rim.or.jp/~sugiyama/mizube.html>